

# 回帰する移民の歴史

## ——文学作品が描くイタリアと移民——

栗原俊秀

### 1. はじめに

2000年に直木賞を受賞した金城一紀『GO』（講談社）は、「在日」の青年を語り手に据えた青春小説である。主人公の杉原（朝鮮名は「李」）は、中学までを日本の民族学校で過ごした後、一般の日本人が通う都内の私立高校に進学する。やがて、杉原は桜井という日本人の少女と恋に落ちる。作品の中盤、世田谷の高級住宅地にある桜井の自宅で、杉原は桜井とともに映画『ゴッドファーザー』三部作を鑑賞する。杉原にとって、『ゴッドファーザー』は特別な意味を持つ映画である。

『ゴッドファーザー』シリーズは、すべての移民（難民）とその末裔のための作品だった。この世界から移民（難民）がいなくならない限り、『ゴッドファーザー』シリーズは永遠の価値を保ち続ける [.....]。<sup>1)</sup>

杉原はここで、およそ一世紀前にアメリカに渡ったイタリア系移民の人生を、「在日」の人生に重ね合わせている。「移住」という共通の経験が、異なる土地に生まれ落ち、異なる時代を生き抜いた人びとの物語を結びつける。

移民（難民）の歴史は回帰する。移民（難民）を描いた文学や映画の多くは、言語、国籍、差別、同化、アイデンティティといった主題を繰り返し描きつづけている。本稿は、こうした「移民の歴史の回帰性」に着目し、移民という現象の普遍性を文学作品のうちに読みとろうとする試みである。本稿ではとくに、「イタリアと移民」に関係のある小説を参照する。筆者はこれまで、アルジェリア系イタリア人作家（アマーラ・ラクース）、イタリア系アメリカ人作家（ジョン・ファンテ）、そして、東方正教時代のアルバニアにルーツを持つイタリア人作家（カルミネ・アバーテ）らの小説を日本語に翻訳してきた。以下では、主にこれらの作品を参照しながら、移民の歴史の回帰性を浮き彫りにしていきたい。

### 2. 移民 (immigranti) と移民 (emigranti)

ここ数年、とりわけ「アラブの春」の勃発以降、日本でも多くのメディアが、ヨーロッパに押し寄せる難民について報道するようになった。とはいえ、移民や難民をめぐる諸問題は、二十一世紀になって突然に生じたわけではない。二十世紀を通じて、西欧各国はさまざまな形で、移民や難民との関係を築いてきた。

本稿の冒頭で述べた「移民の歴史の回帰性」は、イタリアと移民の関係について考察する上でのキーワードである。アルジェリア出身の作家アマール・ラクースは、この主題にとくに強い関心を示している作家といえる。たとえば、この作家の出世作『ヴィットーリオ広場のエレベーターをめぐる文明の衝突』には、以下のような一節がある。

今夜テレビで、アルベルト・ソルディとクラウディア・カルディナーレの素晴らしい映画を見た、オーストラリアで働くアメデーオという男の物語だ。過去のイタリア系移民の人生は、今日イタリアにやってくる移民たちの人生に、とても良く似ている。歴史の流れのなかで、移民の姿はつねに不変だ。変わるの、言葉と、宗教と、肌の色だけだ。<sup>2)</sup>

現代のイタリアは「移民 (immigranti) の受け入れ国」という立場にある。けれど歴史を振り返るなら、十九世紀末から二十世紀の半ばにかけて、イタリアは長らく「移民 (emigranti) の送り出し国」であった。イタリア系移民が目指した先は、フランス、スイス、ベルギーといった近隣のヨーロッパ諸国や、アメリカ合衆国、アルゼンチン、ブラジルに代表される新大陸の国々など多岐にわたる。

移住先で、イタリア系移民はどのような生活を送っていたのか。イタリアの現代作家メラニア・G・マッツッコの『ヴィータ』は、二十世紀のはじめに合衆国に移住した、マッツッコの祖父の体験をもとに書かれた長篇小説である。マッツッコは膨大な資料をもとに、当時のイタリア系移民の生活を丹念に再現している。以下に引く一節からは、かつてアメリカ人がイタリア系移民に対して抱いていた、ほとんど恐怖にも近い嫌悪感を読み取ることができる。

表玄関の門には「犬、黒人、イタリア人立ち入り禁止」と書いてあった。カフェのガラス窓には「犬、黒人、イタリア人お断り」とあった。[.....] ディアマンテは今では、ナポリ弁の「グアッポ」に響きの似たあの言葉が何を意味するのか理解していた。「ワップ」というその言葉は、イタリア人という意味だった。「イタリア人」とは、侮辱の言葉だった。[.....] ほかに「デイゴ」という侮蔑語があり、これもまたイタリア人を意味する言葉だった。もし、人が誰かにデイゴと言ったなら、その誰かは馬の下痢よりも低級な存在と見なされているということだった。<sup>3)</sup>

引用箇所にある「ワップ」や「デイゴ」という侮蔑語は、イタリア系移民二世の作家ジョン・ファンテの作品にもたびたび登場する。1940年に上梓されたこの作家の短編集『デイゴ・レッド』には、「とあるワップのオデュッセイア」と題された一篇が収められている。デイゴ・レッドとは、(デイゴたちが飲み交わす) 安物の赤ワインを意味する侮蔑表現である。「とあるワップのオデュッセイア」には、イタリア系移民家庭で生まれ育った多感な少年の受難が、毒のこもった強烈なユーモアとともに描かれている。

教区学校に通い始めた最初の日から、僕はワップと呼ばれることを身震いするほどに恐れていた。どうして人は姓などというものを使うのか、その理由を悟るやいなや、僕はほ

かの生徒たちの名前にある、ビアンキだの、ボレッコだの、パチェッリだのといったいかにもイタリア的な名字を、自分のものと比べてみた。この比較は僕に、喜ばしい慰めをもたらした。僕は思った〈これなら周りの人たちは、僕をフランス人だと言うだろう〉たぶん僕の名前には、フランス的な趣があるんじゃないだろうか？ [.....] 要するに、僕は自分の出自を憎みはじめていた。僕と仲良くしようとしてくるイタリア人の男子や女子を、僕は避けた。<sup>4)</sup>

ここに描かれているのは、移民の第二世代が自己形成の時期に直面する普遍的な苦悩である。語り手の少年は、自分がイタリア語を話せることを学校の友人たちに隠している。言語や名前は、その担い手である人間がいかなるコミュニティに属しているかを露わにする、なによりも雄弁な記号だからである。ここからは、上の引用箇所でも触れられている「名前」の主題について、もう少し詳しく検討していきたい。

### 3. 移民の名前

名前の主題は、先に引いたアマーラ・ラクースの作品のなかでもたびたび取り上げられている。『マルコーニ大通りにおけるイスラム式離婚狂想曲』では、エジプトからの移民であり、イタリアの友人知人からはソフィア（Sofia）と呼ばれている語り手の女性（本名はSafia）が、名前をめぐる以下のような議論を展開している。

人があなたに投げかける最初の質問はいつもこれ。あなたの名前は？ もしあなたが外国人の名前を持っていたら、途端に一枚のバリアが生まれる。それは「わたしたち」と「あなたたち」のあいだの乗り越えることのできない境界なの。[.....] もしあなたがマルコーニ大通りに住んでいて、モハメドという名前だったら、それはもう自動的に、あなたはキリスト教徒でもユダヤ教徒でもなく、一人のムスリムだってことになるわよね。そうでしょ？ [.....] 名前はわたしたちの差異を示す第一の標ってこと。<sup>5)</sup>

ファンテとラクースの作品を比較してみると、二十世紀はじめのアメリカにおけるイタリア系移民の体験と、今日のイタリアにおけるアラブ系やアフリカ系の移民の体験がひどく似通っていることに気づかされる。「言葉と、宗教と、肌の色」を変えただけの同じ物語が、歴史を越えて繰り返されている。

ピエトロ・デイ・ドナートは、ファンテとほぼ同時代を生きたイタリア系アメリカ移民作家である。ドナートの代表作『コンクリートのなかのキリスト』は、1937年に発表されている。これは、アメリカ版の『蟹工船』とでも呼ぶべきプロレタリア文学作品である。イタリアでは2011年に、『コンクリートのなかのキリスト』の新訳が刊行されている。その巻頭には、イタリア共産党や共産主義再建党の議員を歴任してきた、ファウスト・ベルティノッティによる序文が寄せられている。ベルティノッティはドナートの作品のなかに、「移民の歴史の回帰性」を読み取っている。

ジェレミア、ヌンツィアティーナ、パオリーノ、ズィオ・ルイージは、とても近くに、いまだわたしたちの傍らにいる。たんに名前が、アリア、アミンヤ、カマルヤ、サラヤ、ハビブに代わっただけの話だ。言葉は通じず、文化も異なる遠い国へ、同胞たちが旅立っていくのを見送ってきたイタリアは、今や移民の受け入れ国となった。<sup>6)</sup>

ベルティノッティはこのように述べたあとで、現代のヨーロッパに生きる移民たちが置かれた状況を「奴隷の境遇 (schiavitù)」と表現する。かつてのイタリア系アメリカ移民の経験について語った文学作品が、二十一世紀のイタリアにおいて、新たなアクチュアリティを獲得している。アフリカやアラブ世界からの絶え間ない移民の流入が、祖父や曾祖父の世代の苦難に満ちた記憶を、現代のイタリア人のあいだに呼び覚ましているのである。

「移民の歴史の回帰性」に関連してもう一点、イタリアに固有の事情を指摘しておく必要がある。本稿ではこれまで、ある国から別の国への、国境をまたいだ「移民」について論じてきた。けれどイタリアでは、南から北への、国内で完結する移住もさかに行われてきた。たとえば、イタリアを代表する自動車メーカー「フィアット」は北イタリアのトリノに拠点を置いているが、フィアットの発展を支えた労働者の多くは南イタリアからの移民だった。そして、そうした移民の子供たちもまた、名前にまつわる問題に苦しめられてきた。ここでもう一度、アマーラ・ラクススの作品を引用してみよう。

トリノの学校で、僕の友だちのシチリア人や、カラブリア人や、ナポリ人が、サルヴァトーレとか、カルメロとか、ロザリオとか自己紹介するときの気まずそうな態度を、僕は今でも覚えている。周りの連中はいつもあいつらをからかっていた。パスクアーレヤ、ジェンナーロヤ、そのほか似たような名前の友だちについては何をか言わんやだ。気の毒に、あいつらは終わらない嘲笑に耐えなければならなかった。僕はあいつらを、今のイタリアに暮らす移民の子供たちと比較せずにいられない。アラブやアフリカの名前を持った子供たち……。<sup>7)</sup>

『マルコーニ大通りにおけるイスラム式離婚狂想曲』のソフィアは、「名前はわたしたちの差異を示す第一の標ってこと」と指摘していた。アラブ系やアフリカ系の移民ばかりでなく、南から北へ移住したイタリア人にとっても、名前は「わたしたち」と「あなたたち」を隔てる堅固な壁として機能していたことが窺える。

現代のイタリアでは、家事労働や介護労働といったサービス業、製造業、農業などが、移民労働力の主な受け皿になっている。要するに、イタリア人が好んで就業しない仕事を、移民が代わりに(安価な賃金によって)請け負っているということである。ここで忘れてはならないのは、今日のイタリアで移民たちが従事している労働の多くが、「かつて大量移民の時代にイタリア人移民が経験した職種とかなり重なる」<sup>8)</sup>という歴史的な事実である。外国人労働者はイタリア人にとって、「他者 (=あなたたち)」として単純に差別化できない、自らの過去を映し出す鏡のごとき存在と言えるだろう。

#### 4. オデュッセイア

締めくくりに、ここ数年にわたりメディアを騒がせている、西欧への難民流入の問題にも触れておきたい。難民の流入がイタリアではじめて社会問題化したのは、1990年代のはじめのことである。当時、夥しい数のアルバニア人難民が、アドリア海を渡ってイタリアに押し寄せた。イタリアの現代作家カルミネ・アバーテの『偉大なる時のモザイク』には、アルバニア難民の決死の航海を描いた場面がある。

ゼフの一家はブローラの港からゴムボートで出立した。ボートにはアルバニア人とクルド人の難民が乗りこんでいた。[.....] 明かりを消して航行していたにもかかわらず、接岸まであと数分というところで、ゴムボートはイタリアの巡視船に発見されてしまった。即座に、容赦のない追走がはじまった。船頭は目いっぱい速度を上げた。いくら巡視船から逃れるためとはいえ、常軌を逸した速さだった。[.....] ボートの定員は十名だった。けれどこのとき、ボートには三十一人の難民が押しこまれ、そこに船頭とその助手まで乗りこんでいた。波の上を疾走していたボートは水面に勢いよく落ちかかり、度を越した激しい反動のために宙高く浮き上がった。ボートはそのまま、風と波に煽られて転覆した。<sup>9)</sup>

本稿の冒頭で触れたとおり、カルミネ・アバーテは南イタリアに点在するアルバニア系コミュニティ「アルバレシュ」に生まれた作家である。十五世紀末、オスマントルコの侵略を恐れアルバニアからイタリアに渡った正教徒たちが、アルバレシュの始祖にあたる。『偉大なる時のモザイク』の語り手が暮らす「ホラ」という小村は、作家の生地であるアルバレシュ共同体（カラブリア州のカルフィッツィ）がモデルになっている。作品タイトルの「偉大なる時」とは、およそ五百年前、アルバレシュの祖先たちがイタリアに共同体を創建した時代を指している。アバーテの作品では、現代におけるアルバニア難民の運命が、十六世紀に生きた祖先たちの物語に重ね合わされる。

アバーテの文学において、移民（移住）の主題はつねに重要な位置を占めている。アバーテは、ドイツへの出稼ぎ移民の息子として生まれ、自身もまた、大学を卒業後にドイツへと移住している。その後も、ドイツやイタリア国内の各地を転々とした末に、故郷の南イタリアと、配偶者の生地であるドイツとの中間地点に相当するトレント県に居を定める。幼少期の記憶をもとに書かれた自伝的作品『帰郷の祭り』では、一年の大半を父親と離れて過ごさなければならない少年の心の痛みが、豊かな詩情をとおして描かれている。同書の「著者あとがき」のなかで、アバーテは次のように書いている。

故郷を捨て、移住を余儀なくされることへの怒りを、作品に書こうと決めていました。移住とは、何百万というイタリア人が共有してきた経験です。そのなかには私の祖父や父、多くの親戚、ほとんどすべての幼なじみが含まれています。<sup>10)</sup>

五百年前の逃走者たち、現代のアルバニア難民、二十世紀前半から今日までのイタリア系移

民は、「旅立ちを強いられた者」として、同じ物語を共有している。アバーテもまた、アマーラ・ラクースとは違った形で、「移民（難民）の歴史の回帰性」を書きつづけている作家である。

最後に、イタリアでは珍しい「ポストコロニアル文学」の書き手である、エルミニア・デッローロの作品を参照しておこう。デッローロは1938年、イタリア植民地時代のエリトリアに生まれたイタリア人作家である。アフリカ大陸北東部（いわゆる「アフリカの角」）に位置するこの小国は、1941年までイタリアの植民地だった。近年、エリトリアからは多くの難民が西欧に流入している。1988年に発表された『アスマラよ、さようなら』は、エリトリアの首都であり作家の生地でもあるアスマラを舞台にした、デッローロの自伝的長篇である。エリトリアという土地はつねに、作家の文学的想像力の源泉となっている。

2016年に刊行された『目の前の海：Tsegehans Weldeseslassie の物語』は、エリトリアからの難民 Tsegehans の実体験を素材にして書かれた、ルポルタージュの文学作品である。デッローロは作品の冒頭で、2013年10月3日に現実に起こった遭難事故を描写している。

人びとは叫び、祈り、そのうちの何人かは海を叩き、それから船は転倒した。叫びと祈りは、空にも大地にも届かなかった。[中略] それはランペドゥーサ島の近くで遭難した370人の男たち、女たち、子どもたちで、大部分はエリトリアからやってきた人びとだった。

今でも、この人たちの声が聞こえる気がする。砂漠で、海で、牢獄で死んだ人たちの声が。トラックの下にしがみついたり、貨物のあいだに隠れたりしながら死んでいった人たちの声が。生者の記憶のなかで生きながらえようと、懸命に叫ぶ人たちの声が。<sup>11)</sup>

アバーテが描いた90年代のアルバニア難民の経験が、デッローロの描くアフリカからの難民たちによって繰り返されている。先にも見たとおり、アマーラ・ラクースの小説にはこんな一節があった。「歴史の流れのなかで、移民の姿はつねに不変だ。変わるの、言葉と、宗教と、肌の色だけだ」。この指摘は、「移民」という言葉を「難民」に変えても問題なく成立する。難民の歴史は回帰する。だからこそ、文学は同じ主題を書きつづける。作中、Tsegehans は自分たち難民を「現代の奴隷 (schiavi di oggi)」と表現している。これはもちろん、かつて南北アメリカに連行されていったアフリカの人びとを念頭に置いた表現である。アルバレシュの祖先の体験を今日のアルバニア難民が再現し、黒人奴隷の歴史をアフリカの難民が再現している。

デッローロは『目の前の海』のエピグラフに、『オデュッセイア』第七巻五行目の一文を引いている。引用箇所をイタリア語から日本語に訳すと、次のようになる。

人びとは、巨大な深淵を渡っていく  
(L'abisso immenso attraversano)<sup>12)</sup>

現代の難民である Tsegehans の旅が、この一行のなかに圧縮されている。北アフリカの岸辺からランペドゥーサ島を目指して、難民たちは地中海という「巨大な深淵」を渡っていく。現代の出来事が古典に新たなアクチュアリティを与え、現代を読み解くために古典の力が利用されている。本稿で言及したジョン・ファンテの短篇には、「とあるワップのオデュッセイア」と

いう題名がつけられていた。アマラー・ラクースもまた、ローマに暮らす移民の受難を語る際、ユーモアを交えつつオデュッセウスの名を引いている（「モハメドは、滞在許可証をめぐる彼のオデュッセウスばりの冒険譚を聞かせてくれた。それは長く、じつに悲惨な物語だった」<sup>13)</sup>）。地中海文化圏に属する作家の眼差しのなかでは、移民や難民の人生は、ごく自然にオデュッセウスの航海へ重ね合わされる。書かれた時代も土地も異なるさまざまな作品が、「移民（難民）の歴史の回帰性」をとおして結びつき、集合的な物語を形づくっている。

## 5. おわりに

2017年2月、ジャンフランコ・ロージ監督作品『海は燃えている』が日本でも公開された。このフィルムは、北アフリカからの難民にとってヨーロッパへの「玄関口」となっている、イタリア最南端の小島ランペドゥーサ島を舞台に撮影されたドキュメンタリーである。映画の公開に先立ち、ロージ監督にインタビューを行った作家の小野正嗣は、『海は燃えている』をめぐる論考を文藝誌『新潮』三月号に寄稿している。小野はこの論文のなかで、難民の体験を物語ることの困難さを指摘している。

同じ小さな船にぎゅうぎゅうに乗り込んで海を漂流してきた多数の難民たち。飢え、病気、怪我、死の恐怖。もしもこの航海の体験を語れば、好むと好まざるとにかかわらず、どれも似たような話になりかねない。それぞれがちがう国のちがう土地から来ているにもかかわらず、よほど克明かつ注意深く語られなければ、難民のそれぞれの体験は、その固有性をたちまち失い、それこそ飢饉、政治的・宗教的な差別や弾圧、紛争といったわかりやすい物語に回収される危険にさらされる。<sup>14)</sup>（傍点は原文ママ）

本稿で述べたとおり、移民や難民をめぐる文学に書かれているのは、「どれも似たような話」ばかりである。けれど、それぞれの物語には疑いなく、なんらかの固有性が刻印されている。筆者がこれまでに翻訳してきた作品は、「個」としての人間を描きながら、その背後に広がる普遍性を感じさせるものばかりである。小野の言葉を借りるなら、移民や難民をめぐる文学とは、「どれも似たような話」を、「克明かつ注意深く」語ろうとする試みであり、個別の経験を「分かりやすい物語」に回収しようとする暴力的な欲求への、想像力による抵抗である。

今日、イタリアには約500万人の移民が暮らしている。2016年、地中海で溺死した難民の数は4,500人を超える。こうした情報に触れたとき、移民や難民は「数字」として認識され、その固有性は棄却される。回帰する歴史を看取り、しかも同時に、ひとりの人間が背負う個別の物語を汲み取ることは、けっして簡単な作業ではない。文学を読むことは、「分かりやすい物語」に抵抗し、その誘惑を退ける力を養うための有効な一手段である。冒頭で取り上げた『GO』のなかでは、主人公の親友であり知的先達でもある少年が、こんな言葉を口にしてしている。「独りで黙々と小説を読んでも人間は、集会に集まってる百人の人間に匹敵する力を持つてる」。<sup>15)</sup> 文学を読み、書き、訳す理由が、ここに要約されている。

付記：本稿は、「2016年度国際言語文化研究所連続講座」の第1回「マイノリティを語る——イタリアとフランスのいま——」（2016年10月7日，立命館大学衣笠キャンパス創思館カンファレンスルーム）における発表内容をもとにしたものである。

## 注

- 1) 金城一紀『GO』講談社，2003年，p. 131。
- 2) アマーラ・ラクース『ヴィットーリオ広場のエレベーターをめぐる文明の衝突』栗原俊秀訳，未知谷，2012年，p. 105。
- 3) Melania G. Mazzucco, *Vita*, Torino, Einaudi, 2014, pp. 67-68.
- 4) ジョン・ファンテ「とあるワップのオデュッセイア」, 『デイゴ・レッド』栗原俊秀訳，未知谷，2014年，p. 229。
- 5) アマーラ・ラクース『マルコーニ大通りににおけるイスラム式離婚狂想曲』栗原俊秀訳，未知谷，2012年，p. 25。
- 6) Fausto Bertinotti, *Prefazione*, in Pietro di Donato, *Cristo fra i muratori*, trad. Sara Campese, Textus, 2011, p. 10.
- 7) Amara Lakhous, *Contesa per un maialino italianissimo a San Salvario*, Roma, Edizioni e/o, p. 24.
- 8) 北村暁夫「移民と外国人労働者」, 馬場康雄・奥島孝康編『イタリアの社会：遅れて来た「豊かな社会」の実像』早稲田大学出版部，1999年，p. 186。
- 9) カルミネ・アバーテ『偉大なる時のモザイク』栗原俊秀訳，未知谷，2015年，p. 247。
- 10) カルミネ・アバーテ「著者あとがき」, 『帰郷の祭り』栗原俊秀訳，未知谷，2015年，p. 193。
- 11) Erminia Dell'Oro, *Il mare davanti: Storia di Tsegehans Weldeslassie*, Milano, Piemme, 2016, pp. 7-8.
- 12) *Ibid.*, p. 4.
- 13) アマーラ・ラクース『マルコーニ大通りににおけるイスラム式離婚狂想曲』, 前掲書，p. 102。
- 14) 小野正嗣「闇のなか，カメラを灯火にして——ジャンフランコ・ロージ『海は燃えている』をめぐる——」, 『新潮』2017年3月号，p. 164。小野は，移民や難民の問題に強い関心を払っている作家である。以下のインタビューを参照。「小野正嗣さん「移民や難民と一緒に『新しい美しさ』を作り出していくべきだ」芥川賞作家が語る」, [http://www.huffingtonpost.jp/2016/07/15/interview-of-masatsugu-ono\\_n\\_11010034.html](http://www.huffingtonpost.jp/2016/07/15/interview-of-masatsugu-ono_n_11010034.html) (2017年3月19日閲覧)
- 15) 金城一紀，前掲書，p. 81。